

巻頭言 生物学的精神医学の歴史を振り返っての雑感

鈴木 道雄

富山大学学術研究部医学系 神経精神医学講座

生物学的精神医学という用語を初めて聞いたときに、若干の違和感を覚える人もいるであろう。筆者自身はそうであった記憶があるし、本学会の名称に関連して、他科の医師から「生物学的精神医学とはどういうものですか」と問われたことも一度ではない。自然科学のみには立脚できない、一般人にはやや理解しにくい精神医学の特質を意識させられた経験である。

生物学的精神医学 (biological psychiatry) という用語が初めて用いられたのは 20 世紀中ごろと思われる。20 世紀の初頭から記述精神医学が大きく発展し、現代の診断分類や症候学の基礎を築いた。それとともに、特に米国では精神分析が隆盛を迎えた。20 世紀中ごろになると、米国で精神分析の一般医学からの過度の離反への反省とともに、精神疾患の生物学的研究の必要性が認識され¹⁾、生物学的精神医学の概念が形成されたようである。Society of Biological Psychiatry (SOBP) の正確な設立年は確認できていないが、その 75th Annual Meeting が 2020 年に開催されている。SOBP の学会誌は Recent Advances in Biological Psychiatry の名称で 1959 年に創刊され、1969 年から現在の Biological Psychiatry に引き継がれて刊行されている。この時期の生物学的精神医学を発展させた動力の中心となったのは、臨床遺伝学の発展と、各種の精神障害に対する効果的な薬剤の発見であると言われている。ちなみに、chlorpromazine は 1952 年、imipramine は 1957 年に発見されている。まもなく、神経伝達物質の化学的不均衡が精神疾患の病態生理を説明する有力な仮説となり、それに基づく薬物療法の進歩が今日の精神科診療に大きく役立っていることは言うまでもない。

しかし、生物学的精神医学の始まり自体は、さら

に以前まで遡ることが可能である。精神機能と神経系との結びつきは、ヒポクラテスなどヨーロッパ古代の医学・哲学者によって想定されていたものの、近代科学としての医学の発展のなかで、生物学的精神医学とみなしうるものの始まりは 19 世紀中ごろと考えてよいであろう。この時代の精神医学者は、それ以前の精神障害の道徳的規範に基づく解釈や、その身体基盤を脳以外の臓器に求める考えに対抗して、自らの学説を表明していたようであり、「精神疾患は脳疾患である」と説いた Griesinger W が代表的である。その後、心と脳の関係を解明するために用いられたのは、古典的な神経病理学とヒトや動物を対象とした実験的手法であった。Bernard C の「実験医学研究序説」が発表されたのが 1865 年であるが、この時期の精神医学は、素直に身体医学と同様の方法論によって精神疾患に対峙していたようである。20 世紀の初めには、この生物学的精神医学の第一の波は十分な成果をもたらさずに衰退し、前述のように、その再興まで約半世紀を待たねばならなかった。

現代の生物学的精神医学は、20 世紀終盤から大きく発展した方法論や技術を基盤にしており、分子遺伝学、分子神経科学、認知神経科学、神経画像、計算論的神経科学などの、広範な分野における非常に速い進歩のなかで、研究が展開されつつある。生物学的精神医学が一世紀前のように停滞することはないであろうが、科学技術の長足の進歩をもってしても、精神疾患の解明は依然として容易ではなく、今後も粘り強く研究を続けていかねばならない。

文 献

- 1) Bennett AE (1953) Biological psychiatry. Am J Psychiatry, 110 : 244-252.